

2. 肥前西部の石棺墓について——概観——

肥前西部に石棺墓を有する遺跡は巻末地名表に示す如く88箇所あるが、これらの多くはかつて存在していたこと以上には不明な点が多い。石棺は構築する時と同様破壊するのにも少人数で事足り、副葬品等ないものが多いので話題になることもなく人知れず破壊されたものも多いと思われる。このような中にあって長崎大学、小田富士雄氏、樋口隆康氏等により離島を中心として調査され成果を挙げたことは特筆さるべきことである。本節ではこれらの調査されたものを中心に主要な石棺墓遺跡を略説し、本地方の石棺の変遷を辿ってみたい。見出の番号は地名表の番号と同じ。

- (1) 化屋大島遺跡 本報告書のとおり
- (6) 風観岳支石墓群（註1） 諫早市と大村市の境界付近標高 200m を計る風観岳の鞍部に位置する。十数基の支石墓が確認されている。下部構造の分るものは少ないが、1基は長方形の箱式石棺を有している。付近より山ノ寺式の土器が採集されている。
- (7) 本明石棺群 諫早市街の北方約 2km 多良山から放射状にのびる舌状台地の突端付近に立地する。昭和15年農道工事に伴い10余基の石棺が発見された。昭和43年にも同様工事によって発見され、翌年にかけ調査された。これらによって20基前後知られた訳であるが、石棺は主軸を略東西に向け、長さは 2m 前後のものと 1m 前後のものがあるようである。鉄刀、刀子、鉈等の出土品がある。時期は弥生終末から古墳時代前期。
- (11) 小佐古石棺 国鉄大村駅の東方約 400m、多良山麓扇状台地の張り出している標高約30m のゆるやかな傾斜地に位置する。昭和44年に1基調査されたが他にも存在するという。石棺は主軸を東西に向け、内法長 168cm、幅34~43cm、深さ 25cm を計る。棺身は 6 枚の板石からなっており、9枚の蓋石で覆われていた。底部には小豆大の小円礫が敷いてあった。遺物は検出されなかった。
- (22) 五反田遺跡 東彼杵郡川棚町を貫流する川棚川の堤防線及びその周辺に位置し標高約10m を計る。昭和47年堤防欠壊により石棺が現われ調査された。石棺は 6 基確認されたが主軸方向に整一性はみられなかった。完存のものはなかったが長さは 150~180cm と考えられる。遺物はなかったが、付近より土師器が検出されている。
- (23) 松ヶ崎古墳 大村湾最北部江上浦に面した小岬の先端に位置する円墳である。標高約10m を計る。昭和48年調査された。石棺は 1.5m × 1m あり、直刀、土師器等が検出された。
- (25) 白浜石棺群 大村湾西岸中央部から大村湾に突出した小台地上にあり標高10m を計る。数年前畑開墾中に石棺 2 基が発見されたというが、規模方向等不明である。他にも存在するという。石棺中より須玖II式の丹塗りの壺が出土している。
- (33) 深堀遺跡 香焼島を眼前に見る砂丘上に立地する縄文~弥生時代の遺跡である。昭和39年

から40年にかけ3次にわたり調査され、埋葬遺構としては石棺1基、甕棺10基、土壙墓18基が確認されている。これらは時期的にみて縄文晩期に属するもの（4基）、弥生時代前期に属するもの（1基）、弥生時代中期に属するもの（24基）に分けられるが、箱式石棺は弥生中期のものである。大きさは内法108×56cm×56cmで、主軸を略北東におく。結晶片岩を板状に割って棺をつくっている。本石棺は遺体埋納後構築されたものである。（註2）

- (34) 脇岬遺跡 野母半島先端の橘湾に面する砂丘上に位置する。本石棺は昭和46年縄文時代中期の脇岬遺跡調査の際検出されたもので、板石を使用して棺身を構成している。内法長さ112cm幅50cm、深さ45cmあり、人骨の他龍泉窯系の青磁器が埋納されていた。この青磁器が後世の流入でないとしたら石棺の時期は鎌倉時代以降とせねばならない。
- (41) 有喜貝塚 橘湾に南面する海岸近くの台地上に立地する。大正14年調査された。遺跡自体は縄文時代中後期の貝塚であるが、貝塚上に2基の石棺が検出された。石棺はいずれも東西方向に主軸をおき、規模は1号石棺は1.5×0.75m、2号石棺は1号石棺の北1.2mのところにあり、東部を欠くが1.35×0.45mを計る。壁材は半分以上貝層に埋っていた。石棺の近くの土層中の伸展葬人骨が検出されていることより他にも埋葬施設があったと考えられるこの人骨の肋骨下より鉄鏃が1個検出されている。
- (43) 原山遺跡 雲仙岳の南麓、諏訪池の東部標高約250mの台地に立地する3群からなる支石墓群で、昭和26年以降数度に及ぶ調査がなされている。昭和35年には45基からなる第3遺跡が完掘された。下部構造として20基の箱式石棺、11基の土壙（内2基には甕棺あり）が確認された。石棺は平面形方形に近く屈葬されたものと考えられている。第2遺跡の石棺も小形で80×60cm前後の大きさである。山ノ寺式の壺、浅鉢、甕が副葬品として出土している。
- (44) 標高10m内外の海岸に沿い南面して傾斜する小丘陵台地に立地する石棺で昭和36年浜口叶、古田正隆の両氏によって調査された。外法長さ103cm、幅75cm、内部の深さ59cmで壁の厚さを10cm程度にした剖抜式の石棺である。底部に堆積した3cm余の土中より石錘2個が検出されている。その他墓地と思われる周辺より、石鍋、土器、白磁、瓦器、人骨等が検出されており、時期は奈良～平安期と考えられている。
- (49) 一野遺跡 島原半島の有明海に面して、半島の中央に位置する雲仙岳より放射状に走る多くの舌状台地の中の一台地の突端に位置する。昭和34年38年工事により発見され、甕棺3、土壙1、石棺5基が確認された。石棺は板状自然石を使用して作られているが粗雑なつくりである。石棺5号蓋石上に土師器2個がおかれていたという。本遺跡の年代は弥生中期より古墳時代末期までとされている。
- (71) 狸山支石墓群（註3） 狸山と呼ばれる標高40m位の小丘上の南側中腹熊野神社の境内にある。7基の支石墓が確認されており、昭和32年に2基調査された。第5号墓は長約60cm、幅40cm、深40cmの方形の粗製箱式棺が内部主体で8個の支石をもっている。第6号墓も箱式石棺であるが、長方形で副葬品として鏗節型大珠が出土している石棺の内外より縄文晩期夜白式の土器が採集されている。

- (72) 大野台遺跡 標高53~62mの舌状山丘に位置する3地点より32基の石棺, 1基の甕棺が確認されている。昭和41年石棺8基, 甕棺1基が調査された。石棺の平面形は方形あるいは長方形をなすが概して小形であり深さは深い, 方位は甕棺も含めて東南東一西北西, 東北東一西南西の内にあり, 略東西方向といえる。石棺内外より縄文晚期の夜臼式土器が検出されている。甕棺も同時期のものである。なお「本遺跡は支石墓を形成していた可能性が強い」とされている。
- (73) 小川内遺跡 標高25mの台地上に立地する遺跡で昭和44年10基の石棺が調査されたが, 後2基が追加確認されている。石棺平面形は方形に近い長方形で長辺は1mを越えるものはない。深さは深く50cm前後のものが多い。夜臼式土器が検出されている。
- (75) 柏ノ木遺跡(註4) 松浦市の中央部を貫流する志佐川の流域標高30mの段丘上に位置する遺跡で, 昭和45年調査された。石組遺構3, 甕棺3が確認されたが更に拡がることが予想されている。東西方向に主軸をおく第2号石組遺構は明らかに石棺であり, 石棺内東部には枕石が置かれており, 付近より長宜子孫系の船載内行花文鏡, ガラス玉, 管玉が検出されている。甕棺は金海式, 立岩式に属するもので弥生前期末よりの遺跡である。
- (78)(79) 峰久保古墳及び田助古墳 平戸島北部の田助港の背後の標高50m前後の東南にゆるく傾斜した台地上に立地する。昭和3年に畑を開墾中古墳が発見された。これが田助古墳である。内部主体は主軸を東西にとる箱式石棺で棺内西端近くより半肉刻獸帶鏡, 内行花文鏡各1面の他勾玉1, 管玉4, 硝子玉39, 算盤玉が出土している。昭和24年調査の際田助古墳の石材を積んだ壇に接したすぐ横から箱式石棺が見出された。封土はみられなかったがこれが峰久保古墳である。石棺は主軸を南北よりやや西にとり内法長1.6m, 幅35~45cm, 深35cmを計る。棺内流入土砂中より田助古墳のものであろう鏡片玉類が検出された。
- (80) 度島中学校遺跡 平戸島の北にある度島のやや西寄りの南岸に面した度島免部落の背後高所にある。昭和2年運動場拡張工事の際甕棺4基と箱式石棺3基があらわれた。石棺は大小あって大きなもので長さ5尺, 幅1尺7寸, 厚2寸あり主軸方向は東西であった。東頭位の人骨が検出されており, 胸部付近より青瑪瑙の管玉が3個出土している。なお石棺は1基であったともいう。
- (81) 勝負田古墳 度島の北にある大島西南部の漁港的山から北西海岸へ通じる道を約500m北上した川内免勝負田墓地の北側にあったもので昭和16, 7年に発見されたという。石棺は4枚の板石を長方の箱形に組合せ, 長辺は4~5尺位あり天井も床も1枚石でつくられ棺の内部は同様な板石の壁で4区分されていたという, 長宜子孫系の内行花文鏡, 勾玉が出土している。
- (82) 根獅子遺跡 平戸島の中央部西側海岸に面した小砂丘上に立地する。昭和8年頃石棺2基が検出された。石棺は板石4枚で四方を囲い, 床も天井も同じ板石でつくられてあった。中の骨は頭を東南にして側面向きの屈葬形をして周囲に木灰をばらばらとつめたようであった。石棺内には1体ずつ骨が埋葬されていて, それぞれ前腕に貝輪をはめており一は両

手に3個ずつ他は一腕に6個位であったという。昭和10年にも近くより人骨数体を発掘しているが石囲い等設備はなかった。同時に出土した甕は弥生中期初頭の城ノ越式土器である。

(83) 松原遺跡　宇久島の中心街をなす南向きの入江に形成された弓状砂洲上に立地する。標高3～4mを計る。明治5年人骨が発見され、昭和25～6年壺が発見されている。昭和43年に調査が行なわれた。これらによって石棺は2基確認されたが内1基は積石塚である。他に支石墓2基、壺甕棺7基、土壙墓1基が知られた。1号石棺は主軸を南より14°東にとり、長さ約80cm、幅30cm、深30cmと小形である。石棺内より板付I式の壺形土器が出土し、壺、甕棺の型式は板付II_a～後期前半代のもので遺跡の時期を知ることが出来る。支石墓より貝輪、貝製垂飾品、貝製白玉が出土している。

(84) 浜郷遺跡　有川港の東方海岸に形成された堤防上砂丘の最高所から背後（陸地側）にかけて立地する。標高は4～5mを計る。昭和32年、41年工事により人骨や甕棺、石棺が発見され、昭和42年、44年調査された。これらによって7基の石棺が確認された。内3基は積石塚である。2基の石棺内より板付II式、城ノ越式の壺形土器が出土している。他に壺甕棺18基、石蓋土壙1基、直葬（土壙墓）12があり、壺甕棺の型式は板付II_a～須玖I式である。副葬品には貝製品が多いが土器（板付II_a～須玖I）の副葬もみられる。他に碧玉製管玉、獸骨、柱状片刃石斧がある。

(85) 滝河原遺跡　若松島南部滝河原瀬戸に南面して弓形弧を呈する長さ300mの砂礫丘上に立地する。砂礫丘は自然堤防となっているがその中央上に板状の片岩を1×0.3mの長方形の箱形に組合せた石棺がある。主軸方向は北西一南東である。中より人骨が出土したという。他にも存在するという。付近より弥生中期の土器片が採集されている。

以上20余の遺跡を略説したが、これによって石棺墓の変遷をたどってみよう。

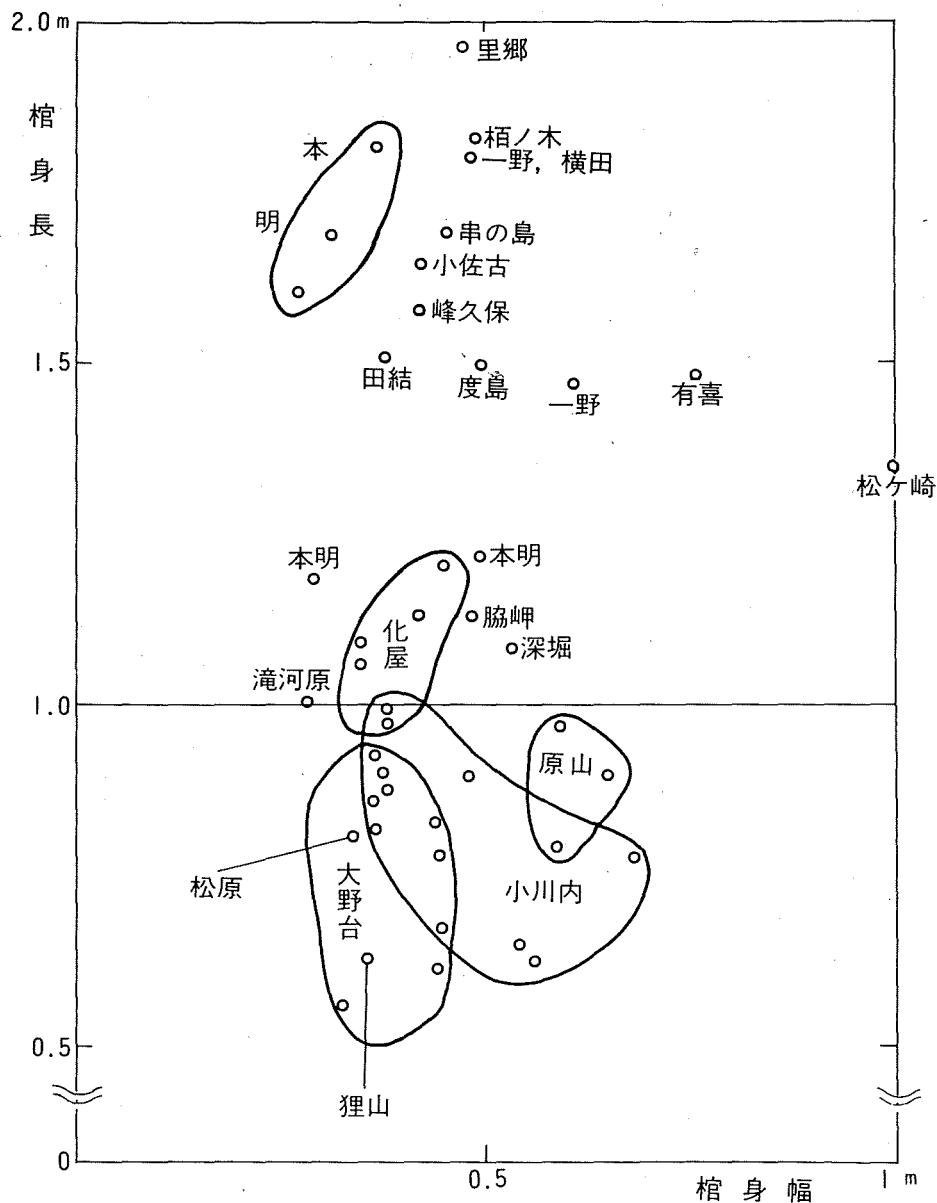
肥前西部に石棺墓の出現するのは繩文時代晚期からである。遺跡は原山遺跡や風観岳支石墓群のように200mを越す高所に営まれたり、北松浦郡の三遺跡のように25～60mの台地に営なまれたりする。石棺は常に支石墓の下部構造として存在し、単独で存在することはないことより両者の間に密接な関係のあることが指摘できる。このことは本地方の石棺の発生が自然発生的なものでなく朝鮮半島より支石墓とともに流入したことを推測させる。しかし、その形態は方形に近い長方形で（註5），長辺の長さも1mを越えることはなく、そのかわり深さが深く、埋葬にあたっては繩文時代の葬法である屈葬がなされていたことが知られる。里田原遺跡の支石墓の下部構造も箱式石棺である。現在、標高17m前後の水田中に3基残っているが、かつては3群7基存在していたことが知られており、周囲との比高も2m前後あったであろうことも確認されている。一部露出している石棺の長辺は95cmを計る（註6）。本遺跡の一部から繩文晚期の木製堅杵や土器等が検出されており、それらが原位置を保っている可能性は少ないとはいえ、繩文晚期の生活空間が近くに存在したことは事実であり、北松三遺跡との距離、標高の

近似とともにこの支石墓の時期の候補に縄文晩期を加えても差支えないと思われる（註7）。

弥生時代に入ると初期の段階から海岸砂丘地に立地するようになり、縄文晩期との関連性がないかの如くであるが、板付I式の壺を副葬していた松原遺跡の石棺の規模は縄文晩期のものと変らず、まだ縄文晩期の伝統が残っていたことがうかがえる。松原遺跡では2基の支石墓も確認されている。石棺の幅は前代のものと変わらないが長さにおいて長くなる。化屋大島遺跡の場合平均110cmあり屈肢葬であったことは先に述べた。副葬品は貝輪、土器が多いが、土器は松原遺跡（板付I）、化屋大島遺跡（板付II）、浜郷遺跡（城ノ越）、白浜石棺群（須玖II）と中期後半まで副葬されている。共同祭祀の有無は不明である。金属器は弥生終末になって現われる。柏ノ木遺跡には内行花文鏡が副葬されていた。古墳時代にかけての本明石棺群からは刀子等が出土している。弥生時代の石棺墓について北部九州との対比において2、3の相違点を指摘できる。前期より石棺墓の存在すること。個々の石棺墓への土器副葬が中期後半までみられること。内行花文鏡を有する石棺が共同墓地の中に他と区別されることなく営なまれていることである。これらは本地方の弥生時代社会構造解明に重要な要素となると思われる。

古墳時代に入ると本地方の古墳の実体が明確でないように石棺についても同様なことがいえる。分布は大村湾東岸、島原半島有明海沿岸の海岸よりの台地突端付近に集中する。この地域は本地方の数少ない平野を構成しており、古墳の造営はこの平野における農耕生産を基礎にしてなされたことを物語っている。石棺は石室の中に収められたものではなく、殆ど直葬である。大村市今富郷所在の黄金山古墳（註8）は横口式の石室をもつが、この石室は組合式石棺を基礎として構築されており、本地方の初期の横穴式石室は石棺との関係が密接であったといえる。古墳の多くは後期であるが、前期に属するものとして、田助古墳、本明石棺群等があるがこれらには顕著な封土はみられず在地的性格が強い。石棺の形式は瓢塚古墳や長塚古墳等の前方後円墳に至るまで全て箱式石棺であり、畿内を中心に分布する割竹形石棺、舟形石棺等や、九州にも一大分布圏をもつ家形石棺もみられない。舟形石棺は唐津市島田塚古墳（註9）長持形石棺は東松浦郡谷口古墳（註10）割竹形石棺は竹田市七ツ森A号古墳（註11）家形石棺は佐賀市西隈古墳（註12）をそれぞれ西限としていることは古墳時代に入ると現在の県境付近で肥前地方を分けることも可能になってくる。このことは石棺に限らず三角縁神獣鏡、埴輪、装飾古墳等の分布についても同様なことがいえる。ただ、田結村役場付近に箱式石棺から舟形石棺への移行期の石棺があったとのことであるが詳細は不明である。古墳時代の石棺は長さが180cm前後となり伸展葬にふさわしく長大化が目につくが、柏ノ木遺跡や本明石棺群の石棺の規模も同様であることは、屈肢葬から伸展葬への変化が弥生時代末期にあったことを示している。

以上は棺身を中心にみてきたが、棺蓋については多くの実例に接しえないためはっきりしないが、時代が新しくなるにつれ使用枚数が増えていくようである。これは棺身が時代とともに



第13図 石棺計測分布図

長大化していくのであるから当然とも思えるが、棺身が2倍になった場合蓋石は2倍以上（多くは3～4倍）になっているのであって、蓋石1枚1枚の長さが短くなっているのである。従って棺蓋についてみると、縄文晩期は支石墓の下部構造として存在しており擇石が蓋石となり1枚であり、弥生時代に入り2～3枚となり、古墳時代に入ると9枚前後となる傾向がうかがえる。栢ノ木遺跡2号石棺は古墳時代的棺身をもち、弥生時代的蓋石で覆われていて両者の性格を兼備えている。

第13図は以上をまとめる意味で石棺の規模を図表化したものである。（註13）時代別にまとまりをみせ、むらの少ないことが分る。副葬品等遺物のない石棺の時期を求める際、立地と共に参考になろう。

（註）

- 1 1974. 県教委、諫早・大村市教委により分布調査が実施され基が確認された。
- 2 賀川光夫「深堀遺跡の調査概要」九州考古学23（1964）
- 3 本遺跡の調査された支石墓の号数について1, 2号とするもの、1, 3号とするものがあるが、ここでは典拠26一イの森氏論文によった。
- 4 本遺跡については典拠28の中間報告があるが、これは訂正さるべき点が多いため筆者の観察によって記述した。
- 5 森貞次郎氏は典拠26一イで石棺を長方形粗製箱式石棺と方形に近い粗製箱式石棺に分け、前者の方が時期が下るとされているが両者の判別は必ずしも明確でない。
- 6 この数値は典拠29による。
- 7 1973.12～'74.5に行なわれた試掘調査の結果による。現在報告書作成中。
- 8 小田富士雄「長崎県大村市、黄金山古墳調査報告」九州考古学39, 40（1970）
- 9 後藤守一「九州北部に於る古墳の2, 3」考古学雑誌12-4（1922）
- 10 梅原末治「玉島村谷口古墳」佐賀県文化財調査報告書第2集
- 11 小田富士雄「九州」『日本の考古学』古墳時代上（1966）
- 12 『筑後古城山古墳』大牟田市教育委員会（1972）
- 13 本図を作成するにあたり、長崎大学医学部助手坂田邦洋氏には、小川内遺跡、本明石棺群等未発表資料の提供をうけた。記して謝意を表したい。

第2表 肥前西部石棺地名表

註 備考欄には伴出埋葬遺構、副葬品を収める。

No.	遺跡名	所在地	確認数	形態	備考	典拠
1	化屋大島遺跡	西彼杵郡多良見町化屋名	7		弥生式土器	1
2	上阿蘇遺跡	〃 多良見町上阿蘇				2
3	阿蘇前遺跡	〃 多良見町阿蘇前				2
4	蔭山遺跡	〃 多良見町中里名蔭山				2
5	貝津遺跡	諫早市貝津町	14			3
6	風觀岳支石墓群	〃 大野	10余	支石墓		4
7	本明石棺群	〃 本明町	20余		刀子、土器	6
8	玖島崎	大村市玖島郷				7
9	河内郷古墳群	〃 德泉河内郷		古墳	鉄片	8
10	八幡宮遺跡	〃 八幡宮	群集			8
11	小佐古石棺群	〃 武部郷	1			9
12	飛行場一帯遺跡	〃 森園町飛行場一帯	群集			8
13	立福寺古墳	〃 立福寺郷		古墳		8
14	鹿の島遺跡	〃				8
15	久津古墳	〃 二の郷久津		古墳		5
16	里郷積石塚	東彼杵郡東彼杵町里郷平		積石塚	石鏑	5
17	才貫田遺跡	〃 東彼杵町里郷平				10
18	串の島遺跡	〃 東彼杵町里郷串の島			赤色素焼土器	5
19	瀬戸遺跡	〃 東彼杵町瀬戸郷瀬戸			紡錘車	5
20	瓢塚古墳	〃 東彼杵町宿郷古金谷	1	前方後円墳		5
21	ワレ権現塚	〃 東彼杵町宿郷古金谷				8
22	五反田遺跡	〃 川棚町上組郷徳島	6			11
23	松ヶ崎古墳	佐世保市江上町	1	円墳	鉄刀、土師器	12
24	三島山古墳	〃 広田町三島	10	古墳	須恵器、土師器	13
25	白浜石棺群	西彼杵郡西彼町白浜	2			14
26	前島遺跡	〃 時津町前島	3		土師器	8
27	木場崎遺跡	〃 時津町日並郷木場				8
28	横瀬遺跡	〃 西海町横瀬中屋敷	3			15
29	天久保貝塚付近	〃 西海町天久保				16
30	出津遺跡	〃 外海町出津				8
31	崎山遺跡	長崎市福田町舟津				17
32	高鉢島遺跡	〃 高鉢島		古墳	土師器	8

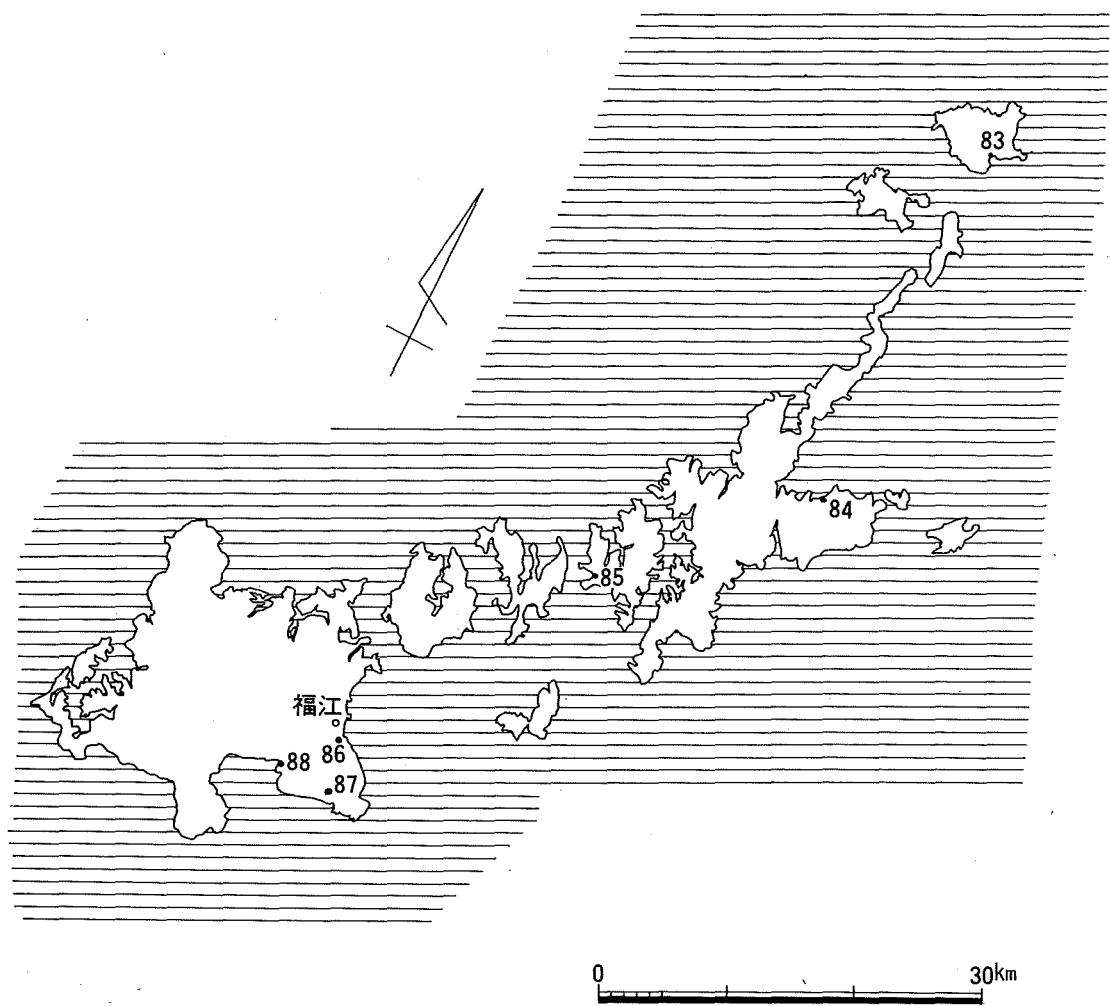
No.	遺跡名	所在地	確認数	形態	備考	典拠
33	深堀遺跡	長崎市深堀町	1		甕棺, 土壙	18
34	脇岬遺跡	西彼杵郡野母崎町脇岬	1		青磁	6
35	牧島遺跡	北高来郡飯盛町池下				8
36	池下遺跡	〃 飯盛町池下	2			8
37	田結貝塚	〃 飯盛町清水名	3			19
38	田結	〃 飯盛町大門	1	積石塚		5
39	田結役場付近	〃 飯盛町	1			5
40	下釜貝塚	〃 飯盛町下釜	4	含積石塚		20
41	有喜貝塚	諫早市有喜町	2	貝塚		21
42	丸古墳	南高来郡千々石町南舟津丸		古墳	鉄劍, 勾玉	5
43	原山遺跡	〃 北有馬町		支石墓	甕棺, 土壙	22
44		〃 南有馬町浦田名	1		石錘	23
45	金比羅神社遺跡	〃 南有馬町北岡尾の上		支石墓		8
46	今福遺跡	〃 南有馬町今福塚田				8
47	上鬼塚遺跡	〃 有家町浦ヶ河名	1			24
48	景華園遺跡	島原市景華園				8
49	一野遺跡	南高来郡有明町大三東一野	5		鉄刀, 須恵器	25
50	道租御前遺跡	〃 有明町大三東松尾			鉄劍	8
51	地蔵山石棺群	〃 有明町				25
52	妙法寺古墳	〃 有明町		古墳		25
53	筏遺跡	〃 国見町神代東里筏				8
54	横田遺跡	〃 吾妻町字山倉	1			33
55	畠島古墳	〃 吾妻町布江畠島		古墳		8
56	馬場鬼塚	〃 吾妻町馬場鬼塚		古墳		8
57	大塚古墳	〃 吾妻町守山坪井大塚	2	前方後円墳		8
58	焼森古墳	〃 栗林共同墓地	1	古墳		8
59	古城墓地古墳	〃 吾妻町古城	1	前方後円墳		8
60	布江鬼塚古墳	〃 吾妻町布江鬼塚	1	古墳		8
61	玉の端古墳	〃 吾妻町玉の端山畠	1	古墳		8
62	荒神古墳	〃 山田川床荒神	1	古墳		8
63	大熊貝塚	〃 吾妻町阿母大熊				8
64	権現山古墳群	〃 愛野町野井今木場		古墳		8
65	鋤先古墳	北高来郡森山町田尻名鋤先		古墳	鉄劍, 玉類	8

No.	遺跡名	所在地	確認数	形態	備考	典拠
66	平原古墳	北高来郡高来町大字平原名田淵		古墳		8
67	宇良溝古墳	〃高来町大字溝口名西口	1	古墳		8
68	帆崎遺跡	〃小長井町小川原浦名鬼塚	10		鉄刀	8
69	淀姫神社遺跡	〃小長井町				8
70	下蔭平遺跡	〃小長井町井崎名下蔭平			甕棺	8
71	狸山支石墓群	北松浦郡佐々町江里狸山	7	支石墓		26
72	大野台遺跡	〃鹿町町深江免大野	8	支石墓	甕棺, 土器	27
73	小川内遺跡	〃江迎町	10	支石墓		6
74	草尾遺跡	〃吉井町草の尾				8
75	栢ノ木遺跡	松浦市志佐町栢ノ木免	2		甕棺・土壙・鏡・玉類	28
76	石郷石棺群	北松浦郡鷹島村				33
77	里田原遺跡	〃田平町里免	1	支石墓		29
78	田助古墳	平戸市大久保免峰久保	1	古墳	鏡・玉類	30
79	峰久保古墳	〃大久保免峰久保	1	古墳		30
80	度島中学校遺跡	〃	3		甕棺	30
81	勝負田古墳	北松浦郡大島村の山川免	1		鏡	30
82	根獅子遺跡	平戸市根獅子町浜久保	2			30
83	松原遺跡	北松浦郡宇久町平郷松原	3	含積石塚	弥生式土器	31
84	浜郷遺跡	南松浦郡有川町浜郷	7	含積石塚	土器, 貝輪	31
85	滝河原遺跡	〃若松町	1			32
86	橘遺跡	福江市下大津町五社神社			土器	8
87	皆塚遺跡	〃上崎山町皆塚			土器	8
88	浜郷貝塚	〃浜町西野郷			土器, 貝輪	8

典拠

1. 本報告書
2. 『多良見町郷土誌』多良見町 (1971)
3. 『諫早市史』第1巻 諫早市教育委員会 (1955)
4. 古賀力氏御教示
5. 津田繁二「我が長崎県の先史時代及び原史時代遺跡遺物の概略について」
長崎談叢第26輯 (1940)
6. 長崎大学医学部解剖学第2教室調査
坂田邦洋氏御教示
7. 田川肇氏御教示

8. 『全国遺跡地図（長崎県）』 史跡名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地地図
文化財保護委員会（1967）
『長崎県遺跡地名表』 埋蔵文化財包蔵地一覧
長崎県文化財調査報告書第1集 長崎県教育委員会（1962），（1963改訂）
9. 『大村市武部郷小佐古石組遺構』 長崎大学医学部解剖学第2教室（1969）
10. 井手寿謙氏御教示
11. 長崎県教育委員会調査
12. 佐世保市文化科学館調査 毎日新聞1974. 2. 11の記事による
13. 『広田町三島 三島山古墳試掘報告』 佐世保市文化科学館（1971）
14. 長崎県教育委員会踏査
15. 『西海町史——概略編——』 西海町（1973）
16. 高野晋司氏御教示
17. 『長崎県郷土誌』 長崎史談会編（1974 復刻）
18. 『深堀遺跡』 長崎県文化財調査報告書第5集 長崎県教育委員会（1966）
19. 酒詰仲男『貝塚に学ぶ』 学生社（1970）
20. 酒詰仲男・中島寿男「肥前下ノ釜貝塚発掘報告」 人類学雑誌58-10（1943）
21. 浜田耕作・小牧実繁・島田貞彦「肥前国有喜貝塚発掘報告」上・下
人類学雑誌41-1.2（1926）
22. (イ)森貞次郎・岡崎敬「島原半島（原山、山の寺、礫石原）及び唐津市（女山）の考古学的調査」 九州考古学10（1960）
(ロ)古田正隆『重要遺跡の発見から崩壊までの記録——縄文晚期原山埋葬遺跡——』
百人委員会埋蔵文化財報告第3集（1974）
23. 浜口叶・古田正隆「石錘の副葬ある石棺」 九州考古学14（1962）
24. 長崎県教育委員会踏査
25. 『一野遺跡（南高来郡有明町）』 有明町教育委員会（1964）
26. (イ)森貞次郎「日本における初期の支石墓」 金載元博士回甲紀念論叢所収（1969）
(ロ)森貞次郎「長崎県狸山支石墓（予報）」 九州考古学5.6（1958）
27. 『大野台遺跡』 大野台遺跡調査団（1974）
28. 正林護『栢ノ木遺跡（中間報告）』 松浦市教育委員会（1973）
29. 吉田敬市「肥前北松浦郡西部の歴史地理学的考察——長崎県北松浦郡田平町を中心として—」
30. 樋口隆康・釣田正哉「平戸の先史文化」 平戸学術調査報告書所収（1951）
31. 小田富士雄『五島列島の弥生文化—総説編—』長崎大学医学部人類学考古学研究報告2（1970）
32. 桑山龍進「五島一般調査報告」 長崎県文化財調査報告書第2集所収
長崎県教育委員会（1962）
33. 長崎県教育委員会記録による



第14図 肥前西部石棺分布図

